

Title	中国における民族教育の現状：東北3省における朝鮮族高校での調査から
Sub Title	Current state of ethnic minority education in China : survey results of Korean minority high schools across three provinces in northeastern China
Author	高木, 丈也(Takagi, Takeya)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2020
Jtitle	Keio SFC journal Vol.19, No.2 (2019.) ,p.62- 80
JaLC DOI	10.14991/003.00190002-0062
Abstract	本稿では中国東北3省における朝鮮族学校の現状報告を行う。分析結果、朝鮮族学校は依然として民族教育機関としての一側面を維持しながらも、中国の教育制度や大学入試制度、近年の社会変化の影響を多分に受けた学校運営を行っていることが明らかになった。また、少子化、漢族化、人口移動といった趨勢にあつて、学校の財政・運営難、教員確保などの問題も顕在化しており、それはともすれば教育の質低下に繋がるものであるが、集住地域であれ散在地域であれ、各校なりの運営努力を行い、目下の状況を打開しようとしていることが明らかになった。
Notes	特集 多言語多文化共生社会に向けた挑戦 招待論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1902-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

[招待論文]

中国における民族教育の現状

東北3省における朝鮮族高校での調査から

Current State of Ethnic Minority Education in China Survey Results of Korean Minority High Schools Across Three Provinces in Northeastern China

高木 丈也

慶應義塾大学総合政策学部専任講師

Takeya Takagi

Assistant Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

Abstract: 本稿では中国東北3省における朝鮮族学校の現状報告を行う。分析結果、朝鮮族学校は依然として民族教育機関としての一側面を維持しながらも、中国の教育制度や大学入試制度、近年の社会変化の影響を多分に受けた学校運営を行っていることが明らかになった。また、少子化、漢族化、人口移動といった趨勢にあって、学校の財政・運営難、教員確保などの問題も顕在化しており、それはともすれば教育の質低下に繋がるものであるが、集住地域であれ散在地域であれ、各校なりの運営努力を行い、目下の状況を打開しようとしていることが明らかになった。

This paper reports on the current state of Korean minority high schools across three provinces in northeastern China. Results of the analysis found that while Korean minority schools continue to function in part as ethnic minority educational institutions, their operations have been subject to considerable influence from the Chinese education system, university entrance examination system, and other societal changes in recent years. In addition, under trends such as a declining birth rate, Han Sinicization, and population migration, school finance problems, management difficulties, and securing of teachers, etc. are becoming more prominent, which may lead, in turn, to a decline in the quality of education. In both densely and sparsely populated areas, great efforts are being undertaken in schools to overcome the current situation.

Keywords: 朝鮮族、民族学校、少数民族
Korean-Chinese, ethnic education, ethnic minorities

1 はじめに

中国東北地方(主に東北3省)には朝鮮半島にルーツを持つ人々が多く居住している。その大部分を占めるのが中国の民族政策において「朝鮮族」(朝鮮族、조선족)と称される民族で、19世紀末からおおよそ半世紀の間に半島から中国大陸に渡っていった人々とその子孫である。朝鮮族は、中国全土で183万人ほどの人口を有しており(『中国2010年人口普查資料』(中国第6回人口センサス))、朝鮮半島以外に居住する朝鮮民族としては在米コリアンに次いで2番目の人口規模を誇る¹⁾。

現在、朝鮮族は第5世代を擁し、中国での定着がかなり進んだ段階にあるといえる。しかし、その一方で、中国社会はこの半世紀の間にも文化大革命(1966～76年)や改革開放政策の導入(1978年～)、中韓国交修交(1992年)、さらにはグローバル化など、多方面における社会変革を経験しており、こうした変化は、彼らの伝統的な民族観、生活の在り方にも少なからぬ影響を与えてきたと推測される。例えば、改革開放政策の導入や韓国との接近は、朝鮮族若・中年層の労働需要を産出し、彼らを沿海部の新興開発地域や韓国へと「再移動」させる契機をもたらした。そして、繰り返される移動は、結果として、東北3省における農村の衰退や朝鮮族学校の統廃合、廃校といった問題を引き起こしたほか、集住地域においてさえ民族性を低下たらしめるといって極めて深刻な問題を招来することとなった²⁾。World Korean(2013)では既に7年前に「中国内の朝鮮族人口は急速な減少傾向にあり、朝鮮族社会の解体による自治州の地位の喪失、民族アイデンティティの危機に瀕している」(筆者訳)との予測を発表しているが³⁾、こうした予測は近年、にわかに現実味を帯びてきている。カネの動きはヒトの動きを加速化させる——このような同時代における世界的潮流に鑑みた時、他地域への人口流出や現存の朝鮮族社会の構成員の民族性の低下は、もはや阻止することが不可能なようにもみえるが、当の朝鮮族社会ではこれをいかに受け止め、どのような取り組みを行っているのだろうか。本稿では、こうした一種の緊迫した問題の解決への端緒を掴むために、試みとして東北3省各地の朝鮮族学校で行った各種聞き取り調査、参与観察の結果をもとに現状報告を行う。本稿の報告をもとにヒトの移動と民族性の継承、教育に関する問題について考える契機としたい。

2 前提事項

紙幅の都合上、研究史についての詳細は高木丈也(2019)に譲るが、朝鮮族の民族性、文化継承を扱った先行研究は、当事者としての朝鮮族の言語意識や民族アイデンティティを論じたものが多く、学校教育、地域・社会の実情までを踏まえて分析したものはそう多くない⁴⁾。本田弘之(2005)に「ある人物が朝鮮語の継承・維持者になるか否は、ほぼ確実に学校教育によって決定される」(本田2005、p.21)との記述があるように、学校教育は個人の民族性の在り方に大きな影響を及ぼす。また、既存の研究では複数の地域を俯瞰的に眺めたものも多くなく、多様な地域に分散して居住する朝鮮族⁵⁾の全体像は未だ捉えられていない。本稿では、以上のような点を踏まえ、複数地域の教育現場で実施した調査結果を総合的に分析し、朝鮮族社会に対するより深層的な理解を目指そうと思う。

以下では、分析に先立ち、本調査の結果を報告するにあたって共有しておくべき、いくつかの前提事項を整理することにする。まずは中国における教育政策について把握するために、中華人民共和国憲法、および同国民族区域自治法をみてみよう(下線は筆者による)⁶⁾。

・ 中華人民共和国各民族一律平等。[憲法 第一章 第四条]

(中華人民共和国の各民族は一律に平等である)

・ 民族自治地方的自治机关保障本地方各民族都有使用和发展自己的语言文字的自由，…。[民族区域自治法 第十条]

(民族自治地方の自治機関は、当該地方の各民族が皆、自己の言語文字を使用し、発展させる自由を有することを保障し、…)

・ 民族自治地方的自治机关根据国家的教育方针，依照法律规定，决定本地方的教育规划，各级各类学校的设置、学制、办学形式、教学内容、教学用语和招生办法。[民族区域自治法 第三十六条]

(民族自治地方の自治機関は、国家の教育方針に基づきつつ、法律の規定に従って、当該地方の教育計画、各級、各種学校の設置、学制、学校運

営方式、教学内容、教学用語、学生募集方式を決定できる)

上掲のような記述より中国における教育政策は、少数民族の独自性を認めながらも、その基本となる指針は国家が管理するという大きな方針がみて取れる⁷⁾。特に、少数民族が学ぶ学校(民族学校)において、漢語+民族語による双語教育(バイリンガル教育)を容認しているという点は注目に値する。

また、中国の学制は、基本的には日本と同様に6・3・3・4制をとっており、【小学(6年)+初級中学(3年)+高級中学(3年)+大学(4年)】により構成される。ここで初級中学(初中)と高級中学(高中)は、それぞれ日本でいうところの中学校、高等学校の教育課程に該当するが、本稿では(固有名詞に言及する場合を除いては)便宜上、日本語式に前者を中学校、後者を高校と称することにする。

3 調査の枠組み

本稿では、筆者が東北3省(吉林省、黒龍江省、遼寧省)の主要都市の朝鮮族高校において行ったインタビュー、参与観察の結果を報告する。各校の情報は以下の通りである。

表1 調査校の情報(最終訪問日基準)

	吉林省 延吉市	黒龍江省 哈爾濱市	遼寧省 瀋陽市
学校名	吉林省延辺第1中学	哈爾濱市朝鮮族第1中学	瀋陽市朝鮮族第1中学
開校年	1952年	1947年	1948年
総学生数	1,340人	530人	680人
朝鮮族	1,268人	240人	630人
漢族	72人	240人	—
韓国人	—	50人	50人
総教員数	180人	93人	130人
朝鮮族	178人	88人	120人
漢族	2人	5人	10人
訪問年月	2017年3月 2017年9月 2018年7月	2017年3月 2018年5月	2015年8月 2017年9月

表1をみてわかるように各校ともに新中国成立前後に設立された伝統校である。吉林省延辺第1中学(以下、延辺1中)は、延辺朝鮮族自治州=集地域に位置し、中国における朝鮮族高校の中で最大規模を誇る学校である。また、哈爾濱市朝鮮族第1中学(以下、哈爾濱1中)、瀋陽市朝鮮族第1中学(以下、瀋陽1中)は、各省内では比較的大きな朝鮮族の人口規模を持つが、自治州に比べると散在の様相を呈する地区に位置する学校である。また、教職員数に対する学生数は、各校ともに1人当たり5~7人台と少なめで⁸⁾、自治州以外に位置する哈爾濱1中、瀋陽1中では韓国人学生が一定数存在すること、漢族教員の比率がやや高めであること、哈爾濱1中では朝鮮族学生と漢族学生が同数存在することも確認される。

4 分析

本章では、調査結果の分析を行う。具体的には、教育方針、時間割、教材・使用言語、教授されている言語という観点から3校を比較した後、各校の個別状況を報告する。

4.1 教育方針

まずは各校の教育方針についてみてみよう。各校の教育方針、目標などを以下に示す(下線は筆者による)。

延辺1中

- ・ 학생양성목표 (学生養成目標)

학생들을 뛰어난 민족인, 우수한 중화인, 개방된 세계인으로 키우는 것이다. (学生を優れた民族人、優秀な中華人、開放された世界人として育てる)

- ・ 학교운영목표 (学校運営目標)

연변 1 중을 전성시범학교로, 전국일류학교로, 세계에 널리 알려진 현대화한 민족학교로 꾸리는 것이다. (延辺1中を全省示範学校、全国一流学校、世界に広く知られる現代化した民族学校とする)

哈爾濱 1 中

- ・ 하면 된다 (なせばなる)

力行传统과 创意力を 바탕으로 德스럽고 睿智로운 人才를 培养하여 祖国과 人類에 贡献하자. (努力、伝統と想像力をもとに気品高く、叡智に溢れた人材を養い、祖国と人類に貢献しよう)

“…已成为在全省民族中学中的涉外交流窗口及品牌学校。” (…すでに(黒龍江)省内の民族中学、高校における涉外交流の窓口、およびブランド校となっている)

瀋陽 1 中

- ・ 教育思想 (教育思想)

一切以学生生动, 活泼, 主动发展和终身发展为本。(全てのことを学生が生き生きと、活発に、主体的に一生発展できることを基本とする)

- ・ 办学特色 (学校運営の特色)

形成了以民族语言和汉语 (双语) 进行教育教学的富有民族特色的教育教学方式…。(民族語と漢語(二言語)により行う民族の特色に溢れる教育、教学方式を形成し、…)

これをみると、「中華人、世界人、全国、世界に広く知られる」(延辺 1 中)、「祖国と人類に貢献」(哈爾濱 1 中)、「主体的に一生発展」(瀋陽 1 中)といった言葉が使用されており、各校とも単に民族教育の枠組みを超えた高次の教育を志向していることがわかる。なお、朝鮮族は中国の公民であり、56 の民族の 1 つに数えられる民族である。つまり、ここにみられる「祖国」とは「中国」を指す。このように教育理念において、中華という国民的次元と朝鮮族としての民族的次元が共存する点は費孝通 (2008) の指摘する「アイデンティティの多層次論」を具現化したものであるといえる。つまり、朝鮮族学校は中華民族 (56 民族の実態) としてのアイデンティティ【高次レベル】と朝鮮民族としてのアイデンティティ【低次レベル】が、互いに排斥し合うことなく、両立、共存可能であるという理念に立脚して設立、運営されているのである。

4.2 時間割

続いて時間割についてみてみよう。以下は、各校の1年生 理系クラスの時間割表をもとに、科目別授業数を比較したものである。

表2 科目別授業時数（週当たり）

	延辺1中	哈爾濱1中	瀋陽1中
週授業数	50	46	50
朝鮮語	5	4	4
漢語	3	4	4
外国語	10	6	5
数学	8	7	5
化学	5	4	3
物理	6	4	3
生物	3	4	2
政治	2	2	3
歴史	2	2	3
地理	2	2	3
体育	2	1	2
その他	2	6	13

表2をみると、基本的に各校ともに教授されている科目は大きな枠組みでは類似していることがわかる⁹⁾。これは、中国の朝鮮族学校では日本の学習指導要領に相当する(国家が制定する)「教学大綱」等に基づいたカリキュラムが展開されているためで、中国における初中等教育の大きな目的の1つが国民統合であることと関係が深いといえよう¹⁰⁾。このように朝鮮族高校では、周辺地域の漢族高校とも基本的には同じカリキュラムが組まれているが、その一方で民族語である朝鮮語の授業が追加されるため、週の総授業時間数は、各校ともやや多めである(ただし漢語の時間は、全体的に少なめとなる)。さらに朝鮮史、朝鮮地理の授業は別途設置されておらず、例えば、それが科目化されている在日コリアンの民族学校における教育カリキュラムとは異なる体系を持つこともわかる¹¹⁾。

また、上述のような共通点がある一方、一部で各校における相違点も確認

される。例えば、設置科目は「教学大綱」に基づきながらも、各科目の開講時間数は同一ではないという点あげられるが、これは第2章でみたように中国では教育カリキュラムの策定にあたっては、自治体、学校による裁量がある程度認められていることによる。また、延辺1中では外国語、数学、物理の時間数が比較的多く、受験を意識したカリキュラムが組まれていることがわかる(外国語の授業数は、瀋陽1中の2倍に相当)。また、時間割表上では延辺1中、哈爾濱1中では主要科目(英語、数学)を2コマ連続で配置し、効率的、集中的な学習に配慮している他、瀋陽1中では美術や音楽など主要5科目以外の充実を図っていることが確認された¹²⁾。

4.3 教材・教授言語

次に教材・教授言語についてみる。尹貞姫(2005)や趙貴花(2016)でも一部、述べられているように朝鮮族高校において使用されている朝鮮語文の教科書は、東北三省朝鮮文教材協議小組による計画、延辺教育出版社朝鮮語文編集室、東北朝鮮文教材研究開発中心(センター)による執筆、全国朝鮮文教材審査委員会による審査という過程を経て、延辺教育出版社が出版している。ただし、出版社の財政状況などとも関係し、目下、その種類は1種しか存在しておらず、多様なレベルに対応することが難しいという問題を持つ。また、その他の科目も北京民族教育出版社で発行されたものの翻訳版が多いため、実質的に朝鮮民族の歴史、文化、社会に対する理解の深化を図ることは難しい状況にある。また、授業の参与観察をしたところ、自治州に位置する延辺1中では基本的に朝鮮語による教材を使用しながら、朝鮮語で授業を進行することに大きな支障がないようであった。しかし、一方で自治州外に位置する哈爾濱1中や瀋陽1中では、朝鮮語による教材を使用する場合であっても、教員が使用する言語は漢語である場合が多く確認された(教材自体が漢語である場合もあった)。ここで各校における教科書の言語、使用言語をまとめると表3のようになる。

表3 教科書の言語、使用言語¹³⁾

学校名	延辺1中	哈爾浜1中	瀋陽1中
教科書の言語 (言語以外の科目)	朝鮮語	朝鮮語・漢語	朝鮮語・漢語
教授時の使用言語	主に朝鮮語	主に漢語	主に漢語
学校内での会話言語	主に朝鮮語	主に漢語	主に漢語

民族学校としての朝鮮族学校における漢語の使用拡大は、移住第4、5世代を迎えた今、むしろ自然な趨勢と言えなくもない。しかし、これらの学校がそれでもなお「民族学校」として存在し続ける拠り所は一体、どこにあるのだろうか。本調査では、その1つの要因として中国の入試制度との関わりが示された。まず、中国の入試制度である全国大学統一入試(高考)の受験科目、配点を整理すると以下ようになる。

1. 必須受験科目(3科目): 語文、数学、外国語
[各150点×3科目=450点]
2. 選択受験科目(1科目): 文科総合(政治、歴史、地理)または、理科総合(物理、化学、生物) [300点]
[750点満点]

この試験に関して特筆すべきは、少数民族への優遇政策(affirmative action)が採用されているという点である。延辺1中の教員によると、朝鮮族が高考を受験する場合、少数民族加点として5点が加算されるほか、全ての科目を民族語(朝鮮族の場合は朝鮮語)で受験した場合は、さらに10点が加算されるという¹⁴⁾。それに加えて語文科目は「民族語+漢語」で受験することが認められているため、漢語の難易度が相対的に低めになるという優遇も受けることができる。このような国家、自治体レベルでの少数民族の優遇政策が存在するため、依然として朝鮮族高校のメリットを感じている保護者、学生は少なくないようである。『길림신문』(吉林新聞)の記事をもとに2017年度と2018年度における延辺朝鮮族自治州の高考の受験者数を整理すると、

以下のようになる。

表4 延辺朝鮮族自治州における高考の受験者数
(『길림신문』 2017/6/7, 2018/6/7 をもとに作成)

年度		2017年度	2018年度
総受験者数		8,314人	8,514人
内訳1	文系	3,429人 (41.2%)	3,397人 (39.9%)
	理系	4,885人 (58.8%)	5,117人 (60.1%)
内訳2	漢語受験	6,802人 (81.8%)	6,969人 (81.9%)
	朝鮮語受験	1,512人 (18.2%)	1,545人 (18.1%)

上記データには(漢族学校に通う)漢族も含まれているということを考えた時、朝鮮語受験を選択した学生が約2割に達するという事実は、無視できない数字である。このような状況から、同時代の朝鮮族学校は、民族語を継承するという大義名分を持ちながらも、大学入試に向けた戦略的学習の場としての役割も担っており、皮肉なことにこうしたメリットが強く認識され、朝鮮族学校が存続しているという側面を指摘することができる¹⁵⁾。

4.4 教授されている言語

続いて教授されている言語についてみてみよう。各校で教授されている言語は、以下の通りである。

表5 教授されている言語

学校名		延辺1中	哈爾濱1中	瀋陽1中
朝鮮語		全員	全員	全員
漢語		全員	全員	全員
外国語	英語	ほぼ全員	多数	多数
	日本語	各学年2, 3人	各学年10～20人	各学年50, 60人

表5をみると、各校ともに朝鮮語と漢語は全員が学んでいることがわかる。これは、4.2でみたように朝鮮族学校では「教学大綱」に基づいたカリキュラムが展開されていることはもちろん、4.3でみたように高考における受験科目を意識していることとの関係も深い。また、外国語に関しては、各校ともに大多数の学生は英語を選択しており、日本語選択者は各校ともに少数であることがわかる。花井みわ(2011)によると、1980年代の自治州内の中学校における外国語教育は、英語が0%で日本語が100%であったが、表5をみると、同時代の朝鮮族学校はもはや日本語教育機関としての役割がかなり弱化していることがわかる。調査校の教員によれば、このように英語の選択者が増加した背景は、近年の中国社会における英語教育熱の高まりと相まって、大学入試、あるいは大学進学、就職のことを考えて学習言語を選択する学生が増えているためだという。なお、こうした趨勢の中であって、依然として日本語選択者が存在するのはなぜであろうか。それは、郊外の学校から進学してきた学生の場合、中学校課程において日本語を学んでおり、高校入学時点において英語の学習経験がないためである。ただし、表5をみてもわかるように延辺1中ではそのような学生は極めて少ないため、日本語の担当教員は他の科目との兼担になることが多い。また、哈爾濱1中では元々日本語選択であった学生が3年次以降に英語選択に切り替えるケースが多く、瀋陽1中でも1990年度以前は全員が日本語を学習していたが、近年は英語選択者が増えているとの情報を得た¹⁶⁾。このように伝統的な日本語教育は各地で衰退の一途を辿っているが、それは特に集住地域である自治州で加速化していることが明らかになった。

4.5 各校状況

ここからは、各校における個別の事例を報告する。

4.5.1 延辺1中

まずは延辺1中についてみてみよう。延吉市内には、延辺第1中学の他にも延吉市第2高級中学、延辺大学付属中学などの朝鮮族高校、延辺第2中学、延吉市第1高級中学などの漢族学校が存在する。その中でも本稿の調査校である延辺1中は、市内トップクラスの学力を誇る進学校であり、そればかりか2018年10月13日付の『高考升学网』では、吉林省最良高校第4位にランクされている。

2017年度時点で、延辺1中のクラス編成は各学年12クラスで、1～8組が理系クラス、9～12組が文系クラスとなっている。文理への振り分けは、1年生のうちに実施しており、大学入試を見据えたクラス編成をしていることがわかる(ただし、学力によるクラス分けはしていない)。なお、表1でみたように漢族(多くは朝鮮族小学校、中学校の出身者)の学生も受け入れてはいるが、特に漢族専用クラスは設置していない。また、学校行事としては、年に1回の文化祭、国慶節に開催される運動大会、秋に実施される朝鮮語文作文コンクールなどがある。民族的な行事は意外に少ないように思えるが、同校が自治州の中心都市に位置していること、進学を見据えた教育を行っていることなどを考えると当然のこととも考えられる。さらに部活動にも力を入れており、男子サッカー部は吉林省1位の実績があるほか、女子サッカー、バスケットボール、バレーボールなどの部が組織されている。学校の敷地内には学生寮があり、一部の学生は一日のほぼ全てを学校内で過ごしている。

なお、同校の2017年度における学生数は、3年生が480人であるのに対し、1、2年生はそれぞれ430人と50人少なかった。同校への入学を希望する学生は多い一方で、このように受け入れ人数を減らしているのは、近隣学校の学生減を防ぐためであるという。ここで中国全土における朝鮮族若年層の大よその人口をみてみると、以下の通りである¹⁷⁾。

表6 朝鮮族 若年層の人口

(『中国 2010 年人口普查資料』をもとに作成)

年齢 [単位: 歳]		人口 [単位: 人]			年齢 [単位: 歳]		人口 [単位: 人]		
2010 年 当時	2019 年 時点	合計	男性	女性	2010 年 当時	2019 年 時点	合計	男性	女性
0	9	9,411	4,893	4,518	8	17	8,866	4,518	4,348
1	10	11,507	5,889	5,618	9	18	9,616	4,889	4,727
2	11	12,077	6,301	5,776	10	19	10,105	5,224	4,881
3	12	12,394	6,378	6,016	11	20	9,979	5,091	4,888
4	13	10,718	5,469	5,249	12	21	10,221	5,150	5,071
5	14	9,940	5,156	4,784	13	22	10,073	5,197	4,876
6	15	10,078	5,155	4,923	14	23	10,863	5,556	5,307
7	16	7,821	4,028	3,793	15	24	12,822	6,488	6,334

⇨ 25 歳 (2019 年時点; 34 歳) : 30,639 人、45 歳 (2019 年時点; 54 歳) : 39,085 人

2019 年時点における 16 歳の推定人口はおおよそ 7,821 人であり、人口が比較的多い (同年基準) 54 歳人口の約 5 分の 1 となっている。このような人口減少に加え、近年、朝鮮族は漢族への同化現象も進んでいるため、自治州であっても郊外に位置する朝鮮族学校の中には学生獲得に大きな困難を伴う学校が出現し始めている。そこで延辺 1 中ではこうした近隣の朝鮮族学校の保護のために、意図的に受け入れ人数を減らしているのである。このような方針は、当然、学校の収益の減少という問題を同伴するが、その一方で、競争率の維持や少人数教育の実現など少なからぬメリットもあるといい、当面は 1 学年 430 人 (12 クラス) を維持していく予定だという。

また、前述の通り、同校ではほぼ全ての授業を朝鮮語で実施しており、民族語の継承という意味において高度な役割を担っているが、その一方で (中国内) 自治州外の大学に進学した際には、ほぼ確実に漢語が優勢な環境に置かれるため、環境への適応が困難になるケースも少なくないという¹⁸⁾。最後に同校は国際部を設置しており、留学生や韓国国籍者を受け入れているが、実際のところ、大部分が中国生まれの学生であるという。ただし、近年はその数も減少傾向で、2017 年時点では全校で 10 人ほどであったという。

4.5.2 哈爾濱 1 中

次に哈爾濱 1 中についてみてみよう。哈爾濱 1 中は自治州外に位置する学校であるが、哈爾濱市の中では比較的、朝鮮族が集住する香坊地区に位置している。教員の話によると、同校は哈爾濱市で学力レベル第 7 位の高校で、クラス編成は各学年 4 クラスずつである。なお、同校は表 1 でみたように朝鮮族と漢族の学生数が同数であるという点が特徴的であり、1 学年の 4 クラスのうち、2 クラスは朝鮮族クラス、2 クラスは漢族クラスとなっている。このような漢族の受け入れ政策は、学生数の減少が顕著になった 2007 年から実施され始め、同校では漢族クラスを「漢族実験班」(한족실험반)と呼んでいる。漢族実験班では朝鮮語の授業が実施されており、入学後ハングルの読み書きからスタートするという¹⁹⁾。また、同校では韓国人学生の受け入れも行っており、2018 年春時点では、50 人程度が在籍していた。この学生達は、早期の語学学習のために留学してくる者、複雑な家庭事情により入学してくる者²⁰⁾という 2 つのグループに大分することができるという。また、文系、理系へのクラス分けは、1 年生の 2 学期から行われており、学生数としては文系が多く、理系が少ないという(延辺 1 中とは逆)。やはり学生寮がある。

なお、同校の教員によれば、最近では漢族も朝鮮語を多く学習するため²¹⁾、朝鮮族としてのアドバンテージの低下が懸念されているという。そこで、近年は英語を選択した朝鮮族学生にも日本語を学習させる取り組みを行っており、週 2、3 コマの授業を開講しているとのことであった。また、漢族実験班を導入したとはいえ、学生の減少は継続しており、その他にも学生間の学力差への対応が難しいこと、学生全体の朝鮮語能力が低下していること²²⁾、基礎体力が低下していること、教員不足、教員の高齢化など、同校が抱える問題は少なくないという。しかし、同校の校長は、休み時間に課外授業を行ったり、学生の適性に合わせた教育を行うなどして、質を大切にしたい教育を行うことで生き残りを図りたいとの意向を示した²³⁾。

4.5.3 瀋陽 1 中

最後に瀋陽 1 中についてみてみよう。瀋陽市内の朝鮮族高校は、1 中(高)、2 中(中高)、3 中(中)、4 中(幼小中)、6 中(中)、朝鮮族師範学校(高)が存

在する²⁴⁾。同校の運営における基本方針は、「中国の政策に従う。しかし、民族の特徴は継承していこう」というものである。これらは、挨拶教育、授業教育の徹底などとして反映されている。また、クラス編成は各学年6クラスずつで、開校記念行事や文化祭などの学校行事が毎年開催されている。同校では地理的な近さもあって、韓国との交流が盛んで、以前は100人規模の留学生が在籍していたというが、近年は減少傾向にある。また、日本・大阪に姉妹校があり、学生を派遣していたこともあるそうである。学校周辺には、朝鮮族経営の飲食店、スーパーが比較的多く、瀋陽市内では西塔²⁵⁾に次いで朝鮮族の多い地域となっている。やはり学生寮が完備されている。

同校で現在、問題になっているのは、朝鮮族教員の不足であるという。そもそも朝鮮族人口が相対的に少ないという現状もあるが、若年層の大卒者の多くは他地域や韓国などでの就職を希望するため、優秀な教員の確保が難しく、それに代替する教員として東北師範大学、遼寧師範大学などを卒業した漢族を採用しているとのことであった。さらに現在のところ、哈爾濱1中における「漢族実験班」のような漢族クラスは設置しておらず、財政面で決して余裕があるわけではない。政府の支援があるから学校が存続できているという状況にあるという。同校の教員によると、これまでは成績重視の教育を展開してきたが、これからもその方向を維持していくべきかについて熟考を重ねているとのことであった。また、保護者の中には朝鮮族学校は教員のレベルが低いと懸念する人がおり、こうした点をいかに克服していくかも課題である。このまま学力偏重の教育を継続した場合、漢族学校の中に埋没してしまう可能性もあるため、特色を生かした教育にも力を入れることが重要であるとの考えも示された。

5 まとめ

以上、本稿では東北3省で実施した調査結果をもとに、朝鮮族学校の現状について報告を行った。分析の結果、朝鮮族学校は依然として民族教育機関としての一側面を維持しながらも、中国の教育制度や大学入試制度、近年の中国社会の変化などの影響を多分に受けたカリキュラム編成を行っていることが明らかになった。「ある人物が朝鮮語の継承・維持者になるか否は、ほぼ

確実に学校教育によって決定される」(本田 2005, p.21)という事実に鑑みた時、朝鮮族学校はその継承者を育成しているとはいえるものの、中国の公民としての朝鮮族が、自国の少数民族政策の枠組みの中で政策実行をしていかなければならないという難しさ、あるいは多くの学生は卒業後には漢語中心の社会に入っていくという現実(「朝鮮族学校における漢語教育の不十分さ」(全成君 2007, p.69))を考えた時、必ずしも最も理想的な民族教育の環境が整っているわけではないことが明らかになった。また、少子化、漢族化、人口移動といった趨勢にあって、学校の財政難、運営難、教員確保などの問題も顕在化しており、それはともすれば教育の質の低下に繋がる危険性を孕むものであるが、集住地域にせよ散在地域にせよ、質の違いはあれど、各校なりの運営努力を行い、こうした状況を打開していこうとしていることが明らかになった。冒頭で述べたように、目下、朝鮮族社会の変化は急速に進んでいる。このような現状把握をもとに今後いかなる解決策が有効であるかも議論されていく必要がある。

謝辞

本稿の執筆にあたって、調査校の先生方をはじめ、SFCのアカデミック・プロジェクト「多言語多文化共生社会」の先生方、張理瑄氏には大変お世話になりました。ここに記して心より御礼を申し上げます。なお、本稿は2018年9月に朝鮮語教育学会(於、京都女子大学)で発表した内容をもとに大幅に改稿したものであることを明らかにしておきます。

注

- 1) 中国内の朝鮮系居住民は、朝鮮族の他にも韓国籍の一般居住者(275,338人)、留学生(62,056人)、永住権者(6,602人)(외교부(2017))、北朝鮮籍の労働者、留学生などが存在する。なお、20世紀における朝鮮半島から中国大陆への移住の時期は、主に①日韓併合(1910年)以降、②3・1独立運動(1919年)以降、③満州国成立(1932年)以降の時期に大きく分けられ、移住要因としては、経済的困窮や植民地下における移住政策などが挙げられる(移住元としては、済州島を除く朝鮮半島各地が確認される)。ただし、同時代における朝鮮族は、1945年8月15日の満州国崩壊、さらには1949年10月1日の中華人民共和国成立以降に中国大陆に残留した人々とその子孫であると定義するのが一般的である。新中国成立以来、中国政府は、朝鮮民族を公民として保護し、1949年には延辺大学、延辺朝鮮族高級中学校(朝鮮族学校)を開校させ、朝鮮語による教育を行った。さらに1952年には延辺朝鮮民族自治区を(55年に自治州に改変)、1958年には長白朝鮮族自治県を設置すると

- ともに、東北3省各地に朝鮮民族自治郷、朝鮮族学校を多く設置した。
- 2) 2019年1月時点で韓国に居住する朝鮮族は724,487人で、朝鮮族総人口の3分の1以上を占める(출입국・외국인정책본부(2019))。朝鮮族の言語使用状況に関しては、高木丈也(2019)を参照されたいが、移住先では(朝鮮族としての)民族教育を受ける機会が少ないため、多くの場合、集住地域からの移動は民族語(方言)、民族性の喪失という問題をもたらす。また、次元を異にする問題であるが、他地域から集住地域への人口流入という点も民族性の希薄化に拍車をかけている(例えば延辺朝鮮族自治州における朝鮮族比率は、1953年の第1回人口センサス時には70.5%であったのに対し、2010年の第6回人口センサス時には36.7%まで低下している)。
 - 3) ある議員の話を用いながら述べている。
 - 4) 数少ない研究の中で出羽孝行、小川佳万といった教育学者、生越直樹、新井保裕といった言語学者による論考は、実際の教育現場を理解するうえで示唆的である。
 - 5) 漢語(いわゆる中国語=中国における第一公用語)では、しばしば中国国内における少数民族の居住様相に関して、「小聚居大杂居」(小集居大雑居:小さな地域に集まって居住し、広大な地域に(多民族と)雑多に居住する)という説明がされることがある。本文中では「集居」を「集住」、「雑居」を「散在」と表す。
 - 6) 現行の中華人民共和国憲法は、1982年12月4日に制定された憲法をもとにして、2018年3月11日に改正、施行された。また、中華人民共和国民族区域自治法は、中国内の各民族の主体としての積極性を高め、発展平等、団結することなどを目的に民族区域の自治を定めた法律で、1984年10月1日より施行されている。なお、以降で引用する漢語、朝鮮語文献の日本語訳は、全て筆者による。
 - 7) 教育課程の基準を策定するのは教育部(日本の文部科学省に相当)であり、これを基に省・自治区・直轄市といった行政単位が地域内の基準を策定する。より具体的には、教育課程を国が定める課程、地方が定める課程、学校が定める課程から成る3層構造とし、地方や学校に教育課程の編成権を認定している(国が定める課程は総時数の80~84%、地方及び学校が定める課程は総時数の16~20%に設定)(勝野頼彦他(2013))。
 - 8) 文部科学省(2013)によると、2010年の日本の後期中等教育(高等学校課程)における教員1人当たりの生徒数は12.2人であった(OECD各国平均は13.8人。なお、ここに中国のデータは提示されていない)。
 - 9) 瀋陽1中で「その他」が多いのは、主に自習時間が多いため。
 - 10) 文型、理系を問わず、3年次まで英語、数学は必修である。
 - 11) 東京朝鮮中高級学校(東京都北区)のHPによると、同校では高校3年生では「朝鮮歴史」が文系では週3時間、理数系では週2時間配当されている。
 - 12) これについては、4.5.3で述べる同校の運営方針とも関係する。
 - 13) 表3は参与観察の結果、最も多く使用されていた言語を示す。「学校内での会話」は、学生間、学生・教員間の会話。
 - 14) 2018年の高校の受験者は、975万人であった(搜狐2018/6/7)。そのため、1点の差は合格判定に極めて大きく作用する。なお、本文中で述べたような加点方式は、自治体によって異なる。
 - 15) このような状況は、自治体による傾向の差があると思われる。今後、詳細な分析を要する。
 - 16) 哈爾濱1中における日本語教員は、中学、高校を併せて5人。また、日本語クラスは漢族も数名受講しており、2年生までは延辺教育出版社の教材、3年生では入試用の問題演習を行っている。瀋陽1中の日本語教員は3人。
 - 17) 中国で実施された最新の人口センサスは2010年のものであるため、ここではそれ

- をもとに 2019 年の推定値を提示する。
- 18) ある教員の話では、卒業後、漢語環境に適応するには約 1 年を要するとのことである。
 - 19) 漢族を受け入れるために、まず市政府の承認を得たという。なお、漢族実験班では朝鮮語の授業を実施しているものの、大学入試を朝鮮語で受けるレベルまでには至らず、一種の国際理解という側面が強いようである（このクラスでは朝鮮民族の伝統衣装や礼節、料理作りの体験授業も行っている）。
 - 20) 朝鮮族の出稼ぎ者が韓国で結婚、出産をしたが、離婚し、子女を同伴して帰国する場合、中国内では朝鮮族学校に通わせることが多いという。
 - 21) 강보유 (2018) によると、2018 年時点、中国の大学に設置された韓国・朝鮮語専攻の数は、約 280 校。
 - 22) 例えば、教員が朝鮮語で話しかけても学生は漢語で返すといった状況が確認された。
 - 23) 「中国の民族政策はいいが、具体的な問題は各民族で考えなければならない」と同校の教員は語っていた。
 - 24) 朝鮮族師範学校では、各種専門教育を実施。また、5 中は既に廃校。
 - 25) 瀋陽市最大の朝鮮族集住地。北朝鮮料理店、韓国風カフェも多く、まさに「コリアタウン」の様相を呈する。

引用文献

- 勝野頼彦他 (2013)『教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 4 諸外国における教育課程の基準—近年の動向を踏まえて—』国立教育政策研究所。
- 全成君 (2007)「延辺朝鮮族自治州における民族教育の現状と課題」『飛梅論集：九州大学大学院教育学コース院生論文集』7, pp. 57-73.
- 高木丈也 (2019)『中国朝鮮族の言語使用と意識』くろしお出版。
- 趙貴花 (2016)『移動する人びとの教育と言語—中国朝鮮族に関するエスノグラフィー』三元社。
- 東京朝鮮中高級学校「東京朝鮮中高級学校のカリキュラム」
http://www.t-korean.ed.jp/_userdata/curriculum.pdf (2019 年 3 月 3 日アクセス)
- 花井みわ (2011)「中国朝鮮族の人口移動と教育—1990 年以後の延辺朝鮮族自治州を中心として—」『早稲田社会科学総合研究』11 (3), pp. 61-82.
- 費孝通編著、西澤治彦他訳 (2008)『中華民族の多元一体構造 (中華民族多元一体格局)』風響社。
- 本田弘之 (2005)「中国朝鮮族の継承語維持方略と日本語教育」『社会言語科学』8 (1), pp.18-30.
- 文部科学省 (2013)『教育指標の国際比較 平成 25 (2013) 年版』文部科学省。
- 尹貞姫 (2005)「中国における「国民教育」と「少数民族教育」の相克—中国朝鮮族学校における教育課程に着目して—」『国際開発研究フォーラム』30, pp.183-200.
- 国务院人口普查办公室、国家统计局人口和社会科技统计司 (2012)『中国 2010 年人口普查资料』中国统计出版社。
- 高考升学网 (2018)「2018 年吉林最好的高中排名, 吉林省重点高中名单及排名」『高考升学网』2018/10/13
<http://creditsailing.com/zkzxw/718101.html> (2019 年 3 月 3 日アクセス)
- 搜狐 (2018)「今日高考 975 万“千禧宝宝”迎来人生大考」2018/6/7
http://www.sohu.com/a/234513841_170888 (2019 年 3 月 3 日アクセス)
- 강보유 (2018)「開幕词 개회사」『중국 한국 (조선) 어교육연구학회 2018 년도

- 연례학술회의 발표집』, pp. 1-5.
길림신문 (2017) 「조선족학교 대학입시 수험생수 여전히 감소세」 『길림신문』 2017/6/7
길림신문 (2018) 「대학입시 시작…수험생들 대박 나세요」 『길림신문』 2018/6/7
외교부 (2017) 『재외동포현황 2017』 외교부 .
World Korean (2013) 「중국 동북 3 성 조선족 인구 감소…조선족 학교 80% 폐교」
『World Korean』 2013/10/26
출입국·외국인정책본부 (2019) 『2019년 1월호 출입국외국인정책 통계월보』
출입국·외국인정책본부 .

[受付日 2019. 9. 26]